

鶏林俳句集第一集（水巴選）

雷の空にいたく煙上ぐ工場かな

葭切や驟雨晴れゆく茶屋の松

一つ咲いて一つ落つ蜀葵残暑かな

颯が居て葉落すや秋の水

草市の後ろを下る夜舟かな

句帖

叔父叔母の新盆来たり茄子の花

富士の北に夜々の雲起つ日干かな

流觴居小集

潮全く満ちし葉末の蛍かな

蛍見しが道海沿ひとなりけり

吟社八月例会 席題「蟻」他

蟻見つつ念なし繭を煮て独り

句帖

月遅き谷となりたる河鹿かな

新涼や夜雨あがりし藁廂

吟社九月例会 席題「夜寒、相撲」

萩芙蓉夜寒の草となりけり

夜寒さの時計が鳴るや百姓家

(曲水3-4)

(曲水3-5)

静岡・長頸子

(曲水3-6)

俳諧走馬燈

(曲水3-3)

○古人の句が良く見える。やがて厭に見える。それから再び良く見える。少し俳句が解って来た時である。

○色んな人が居て色んな句を作って居る。そして、てんでに人の句を褒めたりけなしたり嘲けったりしている。然し俳句な何時でも黙ってゐる。

○一家みな句作るもよし。友二人句作るもよし。己れ独り句作るもよし。されど畢竟は我が独りなり。

○月並は月並として醜なり、論ずべからず。されど月並ならずして醜の醜なるものあり、怠る可からず。

○的を貫ぬく矢は直ぐなるべく句を攫むの心は直ぐなるを宜しとす。

八月一日 青木幸太郎宛

神奈川県中郡秦野町上曾屋片岡伝吉様方

葉月朔日夜十時 東京にて長頸子

旅だよりうれしく拝見いたしました。就中大山へゆく夜の道者の篝火が見えるといふのは面白いぢやありませんか 苔雨君が非常に羨んでゐます。

毎日東京の暑さつたらありませんよ、殊に今日なんか暑い